

履修モデル

学位取得に向けて研究するために、研究課題に即した適切な授業科目を選択しなければならない。そのため、以下の履修モデルを参考に研究課題に即したオリジナルな履修計画を立てることとなる。

健康・栄養科学専修	研究題目	D-、L-アミノ酸微量分析法の構築と発酵食品中の実態調査	
	養成する具体的な人材像	食品企業、試験検査・研究機関などでの専門職員の育成	
	研究内容	近年、食酢、日本酒等の発酵食品中に D-アミノ酸が比較的高濃度で含まれていることが明らかとなり、D-アミノ酸生成機構や D-アミノ酸の新たな機能解明に関心が寄せられている。本研究では、先ず分離カラムに光学異性体が分離可能なキラルカラムを用いた高速液体クロマトグラフィータンデム型質量分析法（LC-MS/MS）による D-及び L-アミノ酸（39種類）の高感度且つ選択性に優れた分析法を構築する。次いで、乳や醤油、黒酢、ヨーグルト等の発酵食品中に含まれるアミノ酸を簡易且つ迅速に分析する前処理法として、食品分析に汎用されている固相抽出による手法を構築する。次に構築した分析法を用いて、国内で市販されている発酵食品（黒酢やヨーグルト等）中の D-及び L-アミノ酸の種類、存在量を把握する。更に、D-アミノ酸生産量の高い乳酸菌を用いてヨーグルトを作成し、D-アミノ酸生産量に及ぼす発酵温度、発酵時間、栄養成分（窒素源、炭素源、ビタミン、ミネラル等）、pH 等の影響を明らかにする。	
	指導教員	堀江 正一教授：全般的指導、研究テーマの選定、研究方法、研究結果の整理と考察、研究発表・プレゼンテーション等 田中 直子教授：研究方法、研究結果の整理と考察	
	履修科目	1 年次	2 年次
		（共通科目） 家族関係論（2 単位） 健康科学（2 単位） 研究方法論Ⅱ（事例研究）（2 単位） （食品分野） 分子細胞学（2 単位） 食品機能学特論（2 単位） 食生活安全学特論（2 単位） 調理科学特論（2 単位） 病態・高齢者代謝学（2 単位） 栄養疫学特論（2 単位） 予防栄養学特論Ⅰ（2 単位）	（食品分野） 臨床栄養学特論（2 単位）
		（研究指導）人間生活科学特別研究Ⅰ（5 単位）	（研究指導）人間生活科学特別研究Ⅱ（5 単位）
		必修 2 科目 10 単位、選択 11 科目 22 単位、合計 13 科目 32 単位履修	

生活環境学専修	研究題目	化学繊維によるアレルギーの誘起機構に関する研究	
	養成する具体的な人材像	繊維・アパレル系試験研究機関の専門職員、中高家庭科教員（専修免許の取得による）	
	研究内容	衣服の着用時にかゆみや赤み等のアレルギー症状を訴える人が増加している。このうち化学繊維アレルギーは接触性皮膚炎に相当する。本研究では、まず原因を追究するためにアンケート調査を行った。その結果、ポリエステルのような化学繊維の着用時に、かゆみや赤みは夏場の発汗時が最も多く発症した。皮膚炎患者の皮膚の状態を調べたところ、健康者と比較して皮膚の pH が高く、水分・油分が低い結果となった。これらの結果から、皮膚炎患者の衣服には、発汗時にも皮膚の pH を弱酸性に保ち、皮膚常在菌のうち黄色ブドウ球菌の活性を抑制する性能が必要であることが分かった。そこで本研究では、皮膚の状態を良好に保つことが可能な弱酸性ポリエステルを使用し、その着用効果を調べた。また、布帛の風合いが皮膚にどのような影響を与えるのかを調べた。さらに、発汗時のかゆみは汗中のかゆみ成分（ヒスタミン）が関係していることから、かゆみ度と繊維の吸水性との関係を明らかにした。	
	指導教員	水谷 千代美教授：全般的指導、研究テーマの選定、研究計画、研究方法、研究結果の整理と考察、研究発表・プレゼンテーション等 阿部 栄子教授：研究方法、研究結果の整理と考察 園野 哲也教授：研究方法	
	履修科目	1 年次	2 年次
		（被服科学分野） 繊維染色学特論（2 単位） 被服管理学特論（2 単位） 衣生活機能学特論（2 単位） （他専修） 運動栄養学特論（2 単位） 栄養生化学特論（2 単位）等	（共通科目） 統計的調査方法論（2 単位） （他専修） 病態・高齢者代謝学（2 単位）等
		（研究指導）人間生活科学特別研究Ⅰ（5 単位）	（研究指導）人間生活科学特別研究Ⅱ（5 単位）
	必修 2 科目 10 単位、選択 10 科目 20 単位、合計 12 科目 30 単位履修		

保育・教育学専修	研究題目	乳児の非言語的な感情の表出に対する保育者の関わり	
	養成する具体的な人材像	高度な専門性を身に付けた保育士、幼稚園教諭、保育者養成校の教員	
	研究内容	保育の現場において、子どもを理解し関わることはとても重要である。この理解は、子どもの言動、行動、表情に基づく。特に言葉を自在に扱うことのできない乳児においては、表情からその思い等を理解することが重要になると考えられる。こうした「理解」の起点となるものとして、保育者の視線に着目したい。乳児保育における「視線」の研究は、乳児自身の「視線」に関する一方向的な研究は多くあるが、保育者との相互的な関わりの中で、その「視線」がどのような意味を持つのかについて述べられた研究は現在のところ見つけることができていない。そこで、本研究では、乳児と保育者の相互的なやりとりの中で保育者はどのように関わっているのか、そしてその保育者の「視線」はどのような意味を持つのかを明らかにすることを目的とする。	
	指導教員	岡健教授	
	履修科目	1 年次	2 年次
		（基礎教育分野） 保育学基礎理論（2 単位） 教育学基礎理論（2 単位） （保育・教育分野） 保育臨床特講（2 単位） 乳幼児発達保育研究特論（2 単位） 保育方法特論（2 単位） 幼児教育実践演習（2 単位） 学校教育実践研究特論（2 単位） 園内研修方法論（2 単位） （心理・社会・文化分野） 臨床発達心理学演習（2 単位）	芸術教育研究特論（2 単位）
		（研究指導）人間生活科学特別研究Ⅰ（5 単位）	（研究指導）人間生活科学特別研究Ⅱ（5 単位）
		必修 2 科目 10 単位、選択 10 科目 20 単位、合計 12 科目 30 単位履修	

（修生科）